

在豪日本人留学生が捉える“異”と“同”の境界意識

－文化の違いは異文化での対人関係形成の阻害要因か－

小 柳 志 津

お茶の水女子大学 大学院人間文化研究科

『人間文化論叢』第5巻（2002年度）

2003年3月発行 抜刷

在豪日本人留学生在捉える“異”と“同”の境界意識

—文化の違いは異文化での対人関係形成の阻害要因か—

小柳志津*

1. はじめに

異なる文化出身者同士の対人接触は様々な“文化の違い”のために困難があると言われている。留学生の交友を調査したBochnerら(Bochner, McLeod & Lin 1977; Furnham & Bochner 1982)は、ホスト国民と留学生の友人関係が質的・量的に低く留まることを指摘し、日本でも留学生と日本人学生の交友が活発でないことは以前から問題視され(横田 1991)、原因究明と問題解決への研究が行われている。田中(2000)は、留学生がホストの行動規範を習得することでホストとの対人関係が良くなり異文化適応も促進される、とソーシャル・スキル理論を唱えている。

異文化適応研究は、異文化滞在者が文化的習慣や行動規範という文化の違いをいかに克服するかが重要である、と文化ごとの規則性の存在を前提に規範の違いへの対処法が心理的安定を左右すると考え、カルチャーショック論では各文化に特有である規範の違いがショックをもたらすと考えた。スキーマ理論は、自文化で培われた文化スキーマ(文化的行動様式)の再組織化や新しいスキーマ構築という作業により異文化適応がなされる、とする(西田2000)。このように、心理学や社会心理学では文化を実体的なものとし、個々の文化の総体を傾向として把握することで様々な現象の実態を明らかにしようと試みている。

しかし、「文化は実在する」という考えに対し、人類学や社会学では西洋文化と対比されるものとしての“異文化”という見方に反省が起こり、文化を実体概念として捉えることに疑問が呈されるようになった。関本(1998)がまとめた文化概念の変遷によれば、「地球上のさまざまな人間集団の相違を、(中略)生物学的な人種の差でなく歴史のかつ局所的にそれぞれ形成される文化の違い」とし「このラベルによって環境と社会的学習を強調するレトリカルな習慣(関本1998, p 28)」即ち、違いを文化とラベリングすることが普及した。その後、文化論は「個々の社会集団ごとの暗黙に習慣化した規則に文化を見るという方法」が取られ、構造的規則性や一般化を目的として学問的に洗練された領域となった、と述べている。しかし、関本は文化的とされる規則がコンテクストにより多義的である点、文化集団の規定が困難である点から、個々の文化の一般化された記述は客観的・論理的には不可能であり、その言説が「真実である」と評価されるか否かは“政治的問題”だとしている。

これらの点から金(1998)は、在日コリアンの研究に際してエスニック・グループを客観的定義から行動体系を分析するという“実体論的アプローチ”ではなく、ドミナントな日本人という他者との相互作用から浮び上がらせる“関係論的アプローチ”を提案している。これは、民族集団の境界は自己と他集団である他者との関係性によって決まるものであり、境界の生成や維持を二者の関係性から分析することが重要だとするBarth(1969)のエスニック・バウンダリーの理論に基づく。即ち、“自と他”、“同と異”という民族や文化の二項対立は、本質的・実体的な特質の違いから発するものではなく、集団への帰属意識と二集団の関係性から(無意識的かもしれないが人為的に)生み出されるお互いの差異化から発するものである、と考えるのである。

本研究では、オーストラリア(以下、豪州)での日本人留学生の対人交流をホスト国民や他の異文化出身者との関係性から分析し、対人関係形成の促進・阻害要因を探る。特に関係論的アプローチに基づき、彼らが何を“自・同”“他・異”とし、どこに、なぜ境界を引いているか、境界の認識が対人関係へどう影響しているかを考え、異文化での対人関係形成についての新しい視座を提示したい。

キーワード：文化的境界、在豪日本人留学生、対人関係

*平成12年度生 人間発達科学専攻

2. 対象者及び方法

対象は、メルボルン地区の大学及び大学院¹⁾に留学する日本人学生31名（男17:女14、平均年齢24.8歳）で、一人2～3時間以上の面接を行い、豪州での生活や交友関係から文化・民族に関する意識までを面接と質問紙調査により日本語でデータ収集した（表1）。本稿ではその中の対人関係（どんな人達とどう時間を過ごすか）や文化規範（日本人と違いがあると思うか）、民族性（日本・豪州・アジア人と思うか）に関する質問項目を中心に分析する。半構造化面接のため他の箇所でも語られたことでもこれらに関係することはデータとした。筆者も本面接時、修士課程の留学生であり、学会等の集りや個人の紹介で対象者を探し面接主旨を説明後に大学や自宅などを訪問した。

表1. 対象者一覧

対象者番号	年齢	性別	在豪期間 年 月	在学課程	留学 形態	居住形態	日本での最終 在学学校
1	20代後半	男	2 1	大学院生修士	私費	寮	大学
2	20代前半	男	1 0	大学院生修士	私費	寮	大学
3	20代前半	男	3 1	大学学部生	私費	その他	高校
4	20代前半	男	4 2	大学院生修士	私費	日本人とシェア	高校
5	20代前半	女	1 3	大学院生修士	私費	他国人とシェア	大学
6	20代後半	男	3 4	大学学部生	私費	その他	高校
7	20代後半	男	3 3	大学学部生	私費	他国人とシェア	大学
8	20代前半	女	1 3	大学院生修士	私費	日本人とシェア	大学
9	20代後半	女	2 6	大学学部生	私費	オーストラリア人とシェア	専門学校短大
10	20代後半	男	2 3	大学院生修士	私費	日本人とシェア	大学
11	20代後半	女	3 3	大学学部生	私費	他国人とシェア	専門学校短大
12	20代前半	女	3 5	大学学部生	私費	オーストラリア人とシェア	高校
13	20代後半	男	2 6	大学院生修士	私費	日本人とシェア	大学
14	20代後半	女	2 7	大学学部生	私費	他国人とシェア	専門学校短大
15	20代後半	男	1 5	大学院生修士	私費	寮	高校
16	20代前半	男	3 6	大学院生修士	私費	オーストラリア人とシェア	大学
17	20代前半	男	4 4	大学学部生	私費	一人暮らし	高校
18	20代前半	女	1 7	大学院生修士	私費	寮	大学
19	20代前半	男	6 8	大学学部生	私費	その他	高校
20	40代	女	0 10	大学院生修士	私費	寮	大学
21	20代前半	男	3 1	大学学部生	私費	一人暮らし	高校
22	20代後半	女	6 7	大学院生修士	私費	一人暮らし	専門学校短大
23	20代後半	女	1 10	大学学部生	私費	他国人とシェア	大学
24	20代後半	男	3 2	大学学部生	私費	一人暮らし	専門学校短大
25	20代前半	男	0 7	大学学部生	交換	オーストラリア人宅ホームステイ	大学
26	10代後半	女	3 5	大学学部生	私費	他国人とシェア	中学
27	20代後半	女	0 7	大学学部生	交換	オーストラリア人とシェア	大学
28	20代前半	女	3 1	大学学部生	私費	寮	高校
29	20代前半	女	4 5	大学学部生	私費	オーストラリア人とシェア	高校
30	20代前半	男	0 7	大学学部生	交換	オーストラリア人とシェア	大学
31	20代前半	男	0 8	大学学部生	交換	オーストラリア人とシェア	大学

豪州の2000年の留学生数は英語学校や中・初等教育も含め約18万8千人（Australian Education International 2002年発表）で、うち大学・大学院に通う留学生は約7万3千人（大学在学率39%）と、留学生が学生全体の1割程の大学も少なくない。8割以上の留学生がアジア圏出身で、日本人留学生は英語学校4,872人、専門学校2,256人、中・初等教育機関1,179人、大学1,762人、合計10,220人、大学在学者が17%と少ないのが特徴である。

また、豪州は多文化主義を提唱する移民国家で、全体の人口1800万人の約25%（約430万人）が国外で生まれ、その内の約20%（86万人）はアジア出身者である（1996年国勢調査）。よって、在豪日本人留学生の環境としてホストの豪州人の他に、留学生や移民との関係も考える必要がある。本研究では、対人交流に関する項目については“豪州人”・“日本人”・“豪州人と日本人を除くその他の国出身者（以下、他国人）”という3つのカテゴリーと日本人留学生の関係性を探っていった。

3. 在豪日本人留学生の対人関係の現状

3.1. 日本人留学生の対人交流範囲—“豪州人”と“他国人”の基準

豪州は多民族国家であり誰を豪州人と判断するかは様々な基準が考えられる。「豪州国籍保有者」や「永住権を持つ移民を含む」、「豪州で生まれた人」としても、本人に確認する以外に日本人留学生が識別する手懸りはない。

換言すれば、外見から相手を豪州人と識別するのは不可能なので、日本人学生が豪州人と他国人の分類をどう考えるかに彼ら自信の民族・文化の捉え方や対人交流の内容が反映されやすい。

日本人留学生の回答から浮び上がる豪州人とは、大学の先生やクラスメイト、寮の現地学生、ホームステイ先家族、エスニック系を除いた店舗の販売員等である。多文化主義に興味を持つ<対象者6>が「豪州人を定義すると不自然になる」と違和感を述べたのと、<対象者31>が中国系移民を豪州人のカテゴリーとして話した他は、日常接する欧州系白人を指していた。豪州原住民のアボリジニはメルボルン地区で接触することはなく回答に出なかった。他国人については大半がアジア系留学生を指し、エスニック系店舗の店員等の移民がたまに出てくる程度であった。具体的に友人網で述べられた他国人の出身は、韓国、中国、台湾、インドネシア、タイ等であり、アジア圏以外ではドイツ、アメリカと答えた学生が一人づついたのみである。

このように面接では自分が関係する人々しか登場せず、接触の少ない人々は彼らの意識に入っていない。生活圏に関係が薄いギリシャやベトナムからの移民は触れられず、豪州人にも他国人にも入らなかった。カテゴリー分類も身近な人々を念頭に置いてなされ、「他国人＝アジア系留学生」が暗黙の内に使われている。同様に「日本人＝日本人留学生」であり、現地永住の日本人や駐在員の話はほとんど述べられなかった。従って、日本人留学生の豪州での対人交流の範囲やネットワークは、「現地学生や教員が中心である西洋系白人の豪州人」「アジア系留学生の他国人」「留学生として滞在する日本人」の3カテゴリーが中核であることが判明したので、以下はこのカテゴリーを使用する。

3.2.対人関係とコミュニケーションにおける壁

在豪日本人留学生にとって“異文化”は豪州だけではない。様々な国からの移民や多くの留学生がいる環境の中、日本ではあまり接触がなかった“他国人”と活発に交流し、友人や仲間として非常に親近感を持っている様子が面接から明らかとなった。日本人学生が豪州で形成した友人の数(表2)を見ると、豪州人に関しては日本人留学生の約半数が4,5人以上の友人を持つが、「1人」・「無し」という学生も2名づついた。自由回答で交友の内容について尋ねたところ、豪州人との交流は大学内が中心で内容も「授業の話をする」等学業に関したことが多く出された。私的な悩みの相談等はあまり行われず「1対1で会うことはない<対象者7,21,31>。」と、パーソナルな関係まで至っていないケースもしばしば見られる。この結果はBochnerら(1977)が指摘する「学業目的遂行の道具的關係」と合致する。しかし同時に、約25%の学生が「親友・恋人は豪州人」とし、ホストとの交友関係には広がりや深さにかなり個人差が見られる。

表2. 在豪日本人留学生の友人の数

		豪州人		日本人		他国人	
		人数	%	人数	%	人数	%
友人の数	多数	9	29.0	11	35.5	14	45.2
	数人	7	22.5	11	35.5	14	45.2
	2、3人	11	35.5	8	25.8	2	6.4
	1人	2	6.5	1	3.2	0	0.0
	無し	2	6.5	0	0.0	1	3.2
	合計	31	100	31	100	31	100

日本人については全員が少なくとも1人以上の日本人友人を持ち、4,5人以上持つ学生が7割程いた。付き合いについては「困るくらいたくさんいる<対象者2>。」から「頼まれごとを断れないので避けている<対象者20>。」と様々なタイプが見られたが、全体的には少数の日本人と深い付き合いをする学生が多く「何か問題がある時は日本人に話す<対象者11>。」というように強い信頼感を持った交友が報告された。

豪州人や日本人との対人関係は個人差が大きかった一方で、約90%が他国人の友人を4,5人以上持つと述べた。大半の日本人学生は他国人友人と「休日に遊びに出かける」「ご飯を一緒に作って食べる」「カラオケに行く」という学外での活動内容を報告している。これはBochnerら(1977)の「遊び中心の余暇的關係」だが、彼らの関係は単に余暇を過ごすだけでなく楽しみの共有という精神的な繋がりであり、「他国人の友人ができた」のが留学で一番良かった事と述べる学生も多く、心理的支えとなっているのがわかる。交友形成も豪州人とは時間がかかることが多いが、他国人との場合は「数日<対象者6>」「すぐに<対象者3>」できるケースが多い。他にも「クラスでも多く話すのはアジア系の人<対象者2>。」「韓国人の友人ができたことが留学で一番嬉しかったこと<対象者13>。」や「他国人とは気を使わず話せず友達になれる<対象者11>。」「すごい仲良しができ他国人との関係に満足<対象者8>。」

「なんとなく親しみを覚える<対象者15>。」と、他国人と日本人学生の活発な交流の現状が明らかとなった。

また、日本人留學生の豪州人と他国人への心理的距離に関して、「話をする際にためらいや恐怖感を感じるか」という質問から接触時のストレスを調べた(表3)。それによると、豪州人とのコミュニケーションでは対象者の約40%が中程度以上のストレスを感じる一方、他国人とでは13%に留まっており、日本人学生は他国人に対してと比べ豪州人との接触により強いストレスを感じる傾向にあることが統計的にわかった(CR=1.87, .05<P<.10)²。英語専攻の<対象者19>は「豪州人とは用がなければ話さないが、日本人・アジア人なら話しやすい。」と、豪州人と話すこと自体に身構えてしまっている。豪州人へのストレスが“強い”とした<対象者4>は「豪州人とは覚悟を決めてから話す。特に若者はバリアがあるような気がする。」と述べたが、他国人に対してストレスは“弱い”とした。このように日本人留學生は豪州人とは壁を高く感じ自ら自然にコミュニケーションが進まない反面「なんとなくアジア系とは話しやすい」と、アジア系留學生には壁を感じていないことがわかる³。また、大学院生の<対象者5>は「豪州人に電話するのは気が引ける」と述べ「豪州人は家族と住んでいるから」と理由付けしたが、ここには“豪州人に電話をかける=コミュニケーションを自分から始める”ことへの緊張感が反映されていると考えられる。

表3. 在豪日本人留學生の接触ストレス

接 ス ト レ ス	強 い 中 程 度 弱 い 合 計	豪州人		日本人		他国人	
		人数	%	人数	%	人数	%
	強い	6	19.4	4	12.9	1	3.2
	中程度	6	19.4	6	19.4	3	9.7
	弱い	19	61.3	21	67.7	27	87.1
	合計	31	100	31	100	31	100

興味深いのは、日本人に対して中程度以上のストレスを感じる者が32%と、他国人を相手とした場合よりストレスがやや高くなっている点だ。これについては「日本人の場合、年齢や言葉遣い等気を使い面倒くさい」という意見が多かった。相手との関係で言葉遣いや対人関係が左右されるという日本の規範が影響していると思われる。大学院生の<対象者1>は「日本語は相手との関係性が出てしまい、どう関係を取ったらいいかわからず困る。」と述べた。これは相手との関係を反映しやすい日本語とあまり反映しない英語の違いの指摘だが、とすれば同じ英語を使っても豪州人に対してはストレスが高く他国人には低いのはなぜか。その点を以下で分析したい。

4. なぜ境界は引かれたか？

以上のように、日本人留學生は豪州人に対してと他国人に対してでは対人関係の形成や心理的距離に違いが見られる。豪州人には壁を感じ他国人には感じていない。今までの研究ではホスト国民と留學生という二者間のみで分析されていたため、異文化出身者間の壁は文化の違いという見方で終わっていた。しかし、本研究では出身文化の異なる留學生同士では壁は見られずホスト国民と留學生の間には壁が確認された。これは“文化の違い”以外の要因があることを示唆している。本節では日本人留學生がどこで“異”と“同”を認識しているかを分析することでこの境界の生成メカニズムを明らかにする。

4.1. “異”と“同”の基準1---言語

日本人学生が“異・同”を感じる基準の第一は、英語の“相対的”能力の認識である。在豪日本人留學生は一般に日本人には日本語で話し日本人以外とは常に英語を使う⁴。従って、豪州人と他国人とを比較した場合、母国語でない英語をコミュニケーション手段とする点では同じであり、単純に考えると語学力の影響は同じと思われる。

しかし、「英語の為、話す時に黙ってしまうか」をコミュニケーションの相手別に尋ねたところ、豪州人とは「よくある」が3名、「時々」10名、「たまに」13名、「あまりない」5名、「全くない」0名と、日本人学生の42%が豪州人と話す際には「よく/時々黙っている」とした。一方、他国人とは「よく」1名、「時々」4名、「たまに」13名、「あまりない」10名、「全くない」3名と、逆に42%が「あまり/全く黙ることはない」と答えた。コミュニケーション・ツールは同じ英語だが、日本人学生は他国人とは問題なく話ができ豪州人に対して沈黙してしまう傾向が強い。

この理由は「豪州人とは英語力が対等でなく緊張する<対象者21>。」という点に集約される。豪州人と同居する<対象者16>も「英語レベルが相手と同じなら話しやすい。授業では『そんな英語で発言するなよ』と思われる」と嫌。実際は自分が勝手に思うだけで皆はそう思っていないんだろうけど。」と英語へのコンプレックスを表現した。

現在の英語力を“かなりできる”と自己評価する<対象者29>も「豪州人には自分の英語が通じないんじゃないかと悲観してしまうが他国人とは大丈夫。」と述べた。今回の対象者は全て大学や大学院の学生達であり英語力は一定水準を超えているのだが、客観的な語学力とは関係なく豪州人とのコミュニケーションでは英語が障害となり他国人とは障害となっていない、という現象が起きている。

これは相手との相対的な言語力の差、言うなれば「豪州人は英語母語話者、自分は非母語話者」という認識が日本人学生にコンプレックスとして広がり、必要以上にプレッシャーを与えているのだ。反対に、非母語話者同士である他国人とは対等なのでリラックスして臨め、臆すことなくコミュニケーションを始め、続けられる。他国人とは非英語母語話者という立場が“同”であり対等であるという意識が生まれ、逆に豪州人は“異”とされて境界が引かれる。

更に、3.1.で概観した「豪州人＝西洋人、他国人＝アジア人」という図式に、この英語母語話者か否かという境界線を持ち込むことでより詳しい図式が得られた。アジア系でも英語が非常に流暢な香港やシンガポールの留学生については、豪州での絶対数が多いにも関わらず日本人留学生の回答の中でほとんど述べられておらず、“他国人”の認識に入っていない。交換留学生の<対象者31>が同じプログラムで在籍するシンガポールの交換留学生について話したのみであった。このように、英語力が対等か、母語話者か非母語話者か、という基準は対人関係形成に大きな影響を与え、在豪日本人留学生が自分達と他者を分ける境界となっている。

4.2. “異”と“同”の基準2---人種

日本人学生が豪州人と他国人の間に境界を見出す第二の要因として、自らの民族性の意識が挙げられる。「自分を日本人と感じるか」という質問に約94%が感じると答えた。これは生まれ育った母国であることやパスポート等の国際法上の分類からも自然であろう。また、「豪州人と感じる」とした者は「スポーツの国際試合で豪州を応援したくなる。」と言った<対象者1>と、「ホームステイ先が家族のようで豪州の習慣も身に付いた。」とした高校から豪州に留学する18才の<対象者26>のみであった。

その一方で「アジア人と感じる」と述べた学生が8割強おり、日本人留学生にアジア人としての意識が見られた。「豪州では日本人ではなくアジア人であることを強く意識する<対象者7>。」「日本人というよりアジア人だと思う<対象者4>。」という強い意識も見られ、中学卒業後中国に3年半高校生として留学しその後来豪した<対象者21>は「日本人とはあまり感じないが、アジア人であると強く感じる」とした。また、「日本では他のアジアに対し優越感があったが、こっちに来てから180度変わった<対象者10>。」というコメントは多くの在豪日本人学生の姿を表している。

彼らのこの認識の背景を理解するために、豪州の状況を説明しよう。豪州は1973年まで白豪主義をとり英語圏・非欧州系移民を制限していたため、20世紀以前に入植した人々を除きアジア系はニューカマーである。その後豪州は多文化主義に転じ、法律上は民族・人種の平等が徹底され、人権擁護の意識は高い。特にアジアとの関係は地理的距離や経済的利益から政策的に重要視しているが、歴史的背景から人種や民族的差別意識がないとは言えない。また、本調査の行われた1997年頃、豪州ではボーリン・ハンソンを党首とするワン・ネーション党がアジア系移民の急増に対し「豪州のアジア化を防ぎ豪州文化を守ろう」という主張をしていた。この人種差別的意見に豪州国民から強い反対運動が起きた一方で、道端で罵声を浴びせられる、物を投げられる等のアジア系住民に対する差別的行為も報道されていた。

こうした環境で日本人留学生は、“アジア人”という明確な規定がないにも関わらず豪州人から見られる「アジア人としての自分」を意識した。自らもアジア人とすると同時に、アジアとして同じカテゴリーに括られるアジア系留学生に強い親近感を持ち“同”の感覚を強めているのがわかる。「西洋人への劣等感をたまに感じる」と言う<対象者19>は「豪州人の中には優越感を持っている人がいるので、劣等の立場に立たされる（下線筆者強調）。」と、置かれた環境でそのような心理状態が構築されることを自ら語った。「豪州人はアジア人や日本人に偏見やわだかまりがあるが、アジア人同士ならそういうのがない<対象者19>。」という発言は、豪州人の人種的偏見を感じ取りその感覚がアジア系を結束させる要因になることを示唆している。

4.3. “異”と“同”の基準3---滞在身分

第三に、“豪州に存在する滞在身分”の基準が考えられる。「豪州では居候の立場。住まわせてもらっているという気で我ままにならないように<対象者15>。」「外国人として住んでいるので限界を感じる<対象者5>。」「他

国人とは同じ留学生。苦楽を共にしている<対象者14>。』と、“ホスト国民”の豪州人に対し“留学生、外国人、居候”という豪州での自己の滞在身分を違いとして見出している学生もいた。

また、直接回答にはなかったが、“留学生”は豪州では日本と違う意味を持つ点に留意したい。豪州の留学生の97%以上はfull-fee payment制度による私費留学生⁵で、学費を賄える経済力を持った人々である。豪州のビザの条件や不法就労の取り締まりは非常に厳しいため、アルバイトで生計を立てなければならない留学生はあまりいない。親の援助が一般的でない豪州人学生と比べお金が自由に使える留学生も多く⁶、留学生は裕福層と見なされている。豪州人が留学生の経済的な裕福さを好ましく思っていないことを筆者は何度か聞いたことがあり、そういった意識が逆に豪州人側に境界を引かせる可能性もある。

4.4. “異”と“同”の基準4---文化規範

第四の基準に、異文化間での対人関係阻害要因とされる文化規範について分析する。豪州人の対人場面での行動様式については、「はっきり言う」、「自己主張や個人主義が強い」、「知らない人でも気軽に話す」等様々な日本人との違いが出された。一方、他国人について、インドネシア人と同居している<対象者5>は「アジア人は『あうん』を求める。アジア人とはアジア的に話したほうがいい。」とし、「アジア系だと考え方が近い。理解してくれるだろうという気がする<対象者9>。」「アジアの方が考えが似ているので打ち解けやすい<対象者18>。」といった報告がされ、全体的な考え方の類似性から“異”の感覚が薄いことがわかる。ここで重要なのは文化規範の詳細ではなく、日本人学生がアジア人に対して「文化的に似ている」と捉えている点、また、少なくとも文化規範が対人関係形成の妨げにはならず、逆に“同”の感覚として促進要因となっている点である。

文化の違いが対人関係に影響するというスキーマ理論やソーシャル・スキル理論のような実体論的アプローチに基づけば、彼らの“異”のレベルの違いは日本文化に対する西洋的豪州文化とアジア文化の文化距離(cultural distance)の違いとされ、文化的距離が近いため差異の克服が容易だと推論されよう。しかし、日本でアジア系留学生と日本人との関係が良好とは言い難い(横田1991)点を考えると、アジア文化圏という共通性は意味がないことがわかる(Tanaka他1994)。また、小柳(2002)は在日アジア系留学生が日本人の文化規範に異の認識を持つと報告している。客観的な文化規範があるのなら日本人とアジア人の間の違いは日本でも豪州も同じはずで、文化的な差異が対人関係を左右するなら日本人とアジア人の関係は日本でも豪州でも同じと考えられる。しかし、豪州での日本人とアジア系留学生の活発な対人交流は、文化規範や行動様式の違いが対人関係形成の阻害要因ではないことを暗示している。

また、日本人留学生は韓国から東南アジアまでを日本と“同”の枠内としているにも関わらず豪州がそこから除外される理由について、個々人の文化的差異の捉え方を分析しながら詳しく見てみたい。

寮生活と授業を通して豪州人学生にもアジア人留学生にも親しい友人が多い<対象者1>は、中国系移民について「彼らは豪州の『自分のことは自分です』という良い意味の個人主義を尊重しないので嫌悪感がある。」と、同じアジア系でも移民に対しては“異”の感覚を持っている。インドネシア人留学生のガールフレンドを持ち彼女の友人達とも親しい<対象者3>は、「アジア系の女の人はお酒を飲まないので付き合いづらい。」と行動様式の差異を述べた。「アジア人は『あうん』を求める」と話した<対象者5>は、別の質問には「インドネシア人の全然違う習慣に時々ついていけない。」と個々の習慣が日本とは違っている点を指摘した。

これらはアジアであっても文化規範が同じ訳ではなく、客観的には異なるのに主観的には似ていると捉えられていることを示す。従って、対人関係において客観的な文化規範の違いというのは(実在するとしても)それ自体さほど問題でなく、多様な基準に基づく境界をはさんで自分と相手がどこに位置するか、即ち、立場により文化規範は主観的に“同・異”の判断がなされていると思われる。日本人留学生とアジア系留学生は多くの立場を共有することで一種の仲間意識を持ち、そのため文化規範の違いは(あったとしても)問題ではなくなり更には同じであるとまで捉えられている、というのが筆者の仮説である。

4.5. 境界意識のもたらすもの

以上を要約すると、第一に、“西洋人—アジア人”、“英語母語話者—非英語母語話者”、“ホスト—外国人・留学生”と複数の領域で境界が発生し、在豪日本人留学生と豪州人との間には境界が引かれてアジア系留学生との間には境界がない、という構図が現れた(表4)。これが彼らの「豪州人は“異”、他国人は“同”」の意識を生んでいる。

表4. 在豪日本人留学生の異と同一の境界意識

境界の基準	対人関係形成におけるカテゴリー			
	豪州人 異・他 現地学生・教員等	(カテゴリー外) 香港・シンガポール留学生	他国人 同・自 その他アジア系留学生	日本人 同・自 日本人留学生
人種的領域	白人・西洋人	アジア人	アジア人	アジア人
言語的領域	英語母語話者	準英語母語話者	非英語母語話者	非英語母語話者
滞在身分の領域	現地人・ホスト国民	外国人・留学生・居候	外国人・留学生・居候	外国人・留学生・居候
文化規範の領域	オーストラリア文化?	アジア文化?	アジア文化?	アジア文化? 日本文化?

*境界の基準となる領域で自分や相手がどこに位置するかを“立場”とする。

(例. 言語的領域では豪州人は“母語話者の立場”、他国人・日本人は“非母語話者の立場”となる。)

第二に、この境界意識は対人関係の形成にも影響している。上記の人種・言語・滞在身分・文化規範の4領域で、豪州人に“異”、又は他国人に“同”の意識が見られた場合を1とし（文化規範の領域で豪州に“同”を感じている場合は-1）、対象者ごとにいくつの領域で境界意識を持っているかを算出し、豪州人友人数との関係を調べた（表5）。この境界意識を持つ領域数と豪州友人数の連関をスピアマンの順位相関係数で算出すると、境界意識をより多くの領域で感じている者ほど豪州人の友人が少ないことがわかる ($r_s = -.44, p < .05$)。授業以外では豪州人と話さないという<対象者13>は「自分と話をしてくれる豪州人はとても優しい人だと思う。」と話したが、この統計結果は結果的に自らを二流市民とし豪州人との接触に引け目を感じている日本人学生の様子を裏付けている。また、<対象者14>は「外国人や留学生と付き合う豪州人は一般と少し違って、外国に興味があるとか考え方が友好的な気がする。そういう人達としか友人になれないし、全く外国に興味がない人とは挨拶程度で関係は終わってしまう。」と述べ、異と同一の意識が単なる“分類”を越え、立場の違いが“境界”となり様々な心理的距離を生んでいることが明らかとなった。

表5. 日本人留学生の豪州人友人数と境界意識の関係

		意識する境界領域の合計数									
		-1領域		0領域		1領域		2領域		3領域	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
豪州人友人数	多数	1	100.0%	2	66.7%	5	31.3%	1	20.0%	0	0.0%
	数人	0	0.0%	0	0.0%	5	31.3%	1	20.0%	1	16.7%
	2, 3人	0	0.0%	1	33.3%	4	25.0%	3	60.0%	3	50.0%
	1人	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	33.3%
	なし	0	0.0%	0	0.0%	2	12.4%	0	0.0%	0	0.0%
合計	1	100.0%	3	100.0%	16	100.0%	5	100.0%	6	100.0%	

注1) パーセントは合計領域数内での割合を示す。30%以上の場合、セルを色付けで表示した。

注2) “意識する境界領域の合計”とは、人種・言語・滞在身分・文化規範のうち、いくつの領域で境界を感じているかを示す。

注3) 文化規範の領域で「日本と豪州は同じ・似ている」と答えた場合は-1領域として計算した。

第三の本研究の新知見は、文化規範の“違い”の認識は、言語・人種・滞在身分等の他の基準によって発生した境界に左右されやすく、これらの領域で“同”の立場となった場合は文化の違いはほとんど問題とならない点である。文化規範の領域は、客観的な違いが客観的に認識されて境界が発生するのではなく、他の多様な境界基準を軸にして“同じ立場”と感じれば規範は肯定的に認識され、客観的な相違があっても主観的には「似ている・同じ」と捉えられる。逆に異なる立場と認識された場合は、文化規範も「違う」となる。豪州人に対し境界意識が弱く豪州人と良好な対人関係を形成した<対象者19,17>は、以前は豪州人と日本人の文化的差異を感じていたが、今では「豪州人は日本人に似ている」と捉えている。

異文化出身者間のコミュニケーションでは“文化の違い”が阻害要因と長らく言われてきたが、実際には対人

関係での文化規範の差の存在自体は大きな問題でなく“立場の違い”が文化の捉え方に大きく影響し、対人関係を左右すると考える方が妥当である。ホストや相手の文化・行動規範を技術や形として取り入れても、境界意識が強ければ文化規範の捉え方は否定的のままで対人関係形成にはつながらない。

しかしながら、“異・同”の境界が、それを分ける基準を持たないことで初めから存在しない事例もあった。バンド仲間と音楽活動を共にし、豪州人友人が多い<対象者24>は「趣味が合うかどうかコミュニケーションのポイント」と述べた。彼には音楽仲間の豪州人達は“同”であった。また、以前は豪州人友人がなく留学生であることにハンディキャップと引け目を感じていた<対象者17>の話は、無意識のうちに引かれた境界を意識的に乗り越え自分から壊すことで境界が消滅する可能性があることを示している。大学入学後1年半経った頃、彼は留学生にも関わらず大学生活を楽しむ友人と出会い一念発起した。「自分も頑張ってみようと、以前は気の進まなかったパーティーに出て一生懸命に社交的に振舞った。そうするうちに豪州人とも段々と仲良くなり、自分の中で吹っ切れるものがあるって面倒くさかった付き合いも自分から楽しいと思えるようになった。」と、今では豪州人と親友関係を築いた自らの変化を話している。

5. おわりに

本稿は、異文化間では立場が違うという認識が境界となり異や同の意識が生まれて対人関係形成に関係することを見出した。従来の「文化の違いが対人関係に影響する」という説に対し、立場の同異が文化の同異の捉え方に影響することを在豪日本人留学生との面接より明らかにした。

在豪日本人留学生の境界意識は、“西洋的英語圏の豪州”で形成されたホスト国民やアジア系留学生への捉え方を反映している。境界意識がホスト国民と異文化滞在者の民族的構成や国家間の経済・歴史的関係などに連動して変わってくることは容易に予想できる。今後、日本という環境ではどのような領域で境界意識が生まれるか、日本のアジア系留学生のケースから検討していきたい。

¹本調査の対象者は大学学部生と大学院の修士でコースワークを履修する学生に限定したため、両者とも授業に出席して単位を取る必要があり、大学で複数の先生や他の学生達と接触する機会はほぼ同等である。

²対応する二つの比の差を臨界比により検定した。

³このようにストレスレベルが低い他国人とのコミュニケーションであるが、「時には戦争の話などで気をつけなければならない」と数人の学生が述べたことも指摘しておく必要がある。

⁴例外的に「日本に留学していた豪州人と日本語で話す」と言った学生が2人ほどいた。

⁵ほとんどの大学が国公立である豪州では、大学は国からの補助をかなり受けており現地学生の学費も非常に低く抑えられている（年間約A\$3600～6000）。Full-fee payment制度は、そのような補助を外した在学にかかる全ての金額を留学生個人が支払うもので、学校や学部により差があるが、現在私費留学生の年間の学費は一人あたりA\$1万～2万（A\$1=約¥65）位となっている。

⁶1998年のAustralian Education Internationalの統計に基づき計算したところ、大学に在学する留学生一人あたりの年間支出額（学費込み）を出身国別に見ると、日本人はA\$23,385、韓国A\$26,909、台湾A\$25,038、インドネシアA\$25,132、タイA\$24,702、中国A\$20,851（A\$1=約¥65）である。

引用文献

- Barth, F. (1969) Introduction. In Barth, F. (ed.), *Ethnic groups and boundaries* (pp9-38) . Boston, Little, Brown and Company.
- Bochner, S., McLeod, B. M. & Lin, A. (1977) Friendship patterns of overseas students: a functional model. *International Journal of Psychology*, 12, 277-294.
- Furnham, A. & Bochner, S. (1982) Social difficulty in a foreign culture: an empirical analysis of culture shock. In Bochner, S. (ed.) *Cultures in Contact* (pp 161-198) . Oxford, Pergamon press.
- Tanaka, T., Takai, J., Kohyama, T. & Fujihara, T. (1994) Adjustment patterns of international students in Japan. *International Journal of Intercultural Relations*, 18 (1) , 55-76.
- 金俊華 (1998) 「在日韓国・朝鮮人のアイデンティティに関する一考察」, 江淵一公編『トランスカルチュラルリズムの研究』, 269-281, 東京, 明石書店
- 小柳志津 (2002) 「留学生における『文化規範』理解のパターン」, 『日本における文化接触研究の集大成と理論化』 箕浦康子編, 科研報告書
- 西田ひろ子 (2000) 『異文化間コミュニケーション』, 大阪, 創元社
- 関本照夫 (1998) 「文化概念の用法と効果」, 梶原景昭他編『文化という課題』, 19-39, 東京, 岩波書店
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』, 京都, ナカニシヤ出版
- 横田雅弘 (1991) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」, 『異文化間教育』, 5, 81-97.

Perceived boundary of ‘differences’ and ‘sameness’ by Japanese students in Australia

: Is difference in cultures a significant variable for constructing interpersonal relationship?

KOYANAGI Shizu

Thirty-one Japanese undergraduate and postgraduate students in Australian universities participated in semi-structured interviews to examine the interpersonal relationships between Japanese students and other nationalities in Australia, in particular, Australians and other international students. It was found that the Japanese students tended to form closer relationships and feel more comfortable in communicating with other Asian students than Australians, and that many regard Asian students as “the same (in-group)” and Australians as “different (out-group)”. The research reveals a boundary perceived by Japanese students to identify Asian students into “us” and Australians into “them” categories. The criteria of the boundary are: “non-native English speakers - native English speakers”; “Asians - Westerners”; and “foreigners or international students - hosts”.

It has been widely held that the difficulties in cross-cultural relationships occur because of cultural distance. Japanese students in Australia, however, did not find difficulties or cultural distance with Asian students, despite the fact that cultural distance between Japanese and Asians in Japan is often reported. Therefore, this article proposes that cultural distance is strongly noticed when people with different cultural backgrounds stand in a different position or group divided by the boundary, and that it is not remarkable when they stand in the same position or group. The cultural difference is not a barrier to cross-cultural relationships, but the perception of the boundary influences the relationships.

Key words : cultural boundary, Japanese students in Australia, interpersonal relationship